U-18 ベースボールワールドカップの優勝を報告した高中選手（2023 年 9 月）

輝いている人を紹介します

まちのキラリ

聖光学院高校野球部 60 期の主将としてチームを率い、U-18 ベースボールワールドカップ世界一の歓喜を伊達市に届けてくれた髙中選手に、聖光学院でのかけがえのない経験と、これからの夢を伺った。

―なぜ、聖光学院で野球がしたいと思ったのですか？

コーチの勧めで聖光のオープンスクールに来て、小・中とやってきた野球とは違う感覚を感じました。「こういう野球をしてみたい！」と思って聖光に決めました。

―実際入ってみて、どんなところでしたか？

まず先輩たちが本気で野球をやっていると感じました。練習よりもミーティングを重視することが衝撃でした。

「どういう人間になるか」という話が特に印象に残っています。「うまい人になるのではなく、強い人」とずっと言われ、目指してきました。

―チーム作りではどんなことを意識していましたか？

周りから「チームは主将で決まる」と言われていました。自分がいつも正しい行いをしなければ誰もついてきてくれない。自分次第でチームが変わると思っていました。

2年の夏の終わりに横山部長から「おまえはずっと笑っとけ」と言われました。赤堀※さんも常に笑顔でした。当時は理解できなくて苦しかったこともありましたが、今年の春夏を経て、その意味が分かるようになりました。自分が暗くなるとそれがチームに伝染します。表情ひとつで雰囲気が変わるので、明るい立ち居振る舞いを心がけました。どれだけ苦しい場面でも、それを笑顔になっていました。福島県大会の決勝戦も自然と楽しめるようでなければと。自分が発光体になれたらと考えていました。

―世界を経験しどんなことを感じましたか？

準決勝・決勝に出させてもらえましたが、それまで打席に立つチャンスがなくて、悔しさやもどかしさがありました。聖光ではレギュラーだったので、控えの選手の気持ちを初めて実感できました。試合に出ていなくても全力で支援してくれたことを思い、改めていい仲間がいて自分は幸せだな、最高の仲間だなと思うことができました。

―伊達で印象に残っていることはなんですか？

夏がめちゃめちゃ暑いこと、冬はめちゃめちゃ寒いことです（笑）。地域の方には雪かきのお手伝いで感謝の言葉をいただいたり、いつも声をかけていただいたりして、温かい人たちに巡り合えたと思います。

―最後に大学や、その先の目標を教えてください

4年後、絶対にプロになるという強い気持ちを持っています。高校で日本一になる夢は叶えられなかったけれど、東洋大学で日本一をとれるように、そしてプロ野球選手になれるようにがんばりたいです。大学野球は、自分たちとは体が全然違っていて、差を感じています。体をしっかり作って、プロでも通用するように技術も磨きたいです。そして、周りから目標とされるようなプロ野球選手になりたいです。

※前主将の赤堀颯選手（現・國學院大學野球部 1 年）

1. 夏の福島県大会前に行われた壮行試合。ベンチ入りできなかった同級生の勇姿に笑顔と涙 /2. 夏の福島県大会決勝。負けている展開でも笑顔を崩さなかった高中選手 /3. 少年野球教室で指導する髙中選手。ここでも印象的な笑顔で子どもたちを惹きつけた

「4年後、絶対プロになる」髙中選手、新たな挑戦へ

聖光学院 / 野球部

たかなか　かずき 髙中 一樹

178㌢ 80㌔ / 内野手
右投右打

2006 年生まれ、愛知県日進市出身の 18 歳。日進西中学校を卒業後 2021 年に聖光学院高校へ進学し、2024 年 4 月から東洋大学（東都大学野球連盟 2 部リーグ）に進学する。聖光学院では 1 年の秋からレギュラー入りし、2 年の秋から主将を務めた。春 1 度、夏 2 度の甲子園大会出場経験があり、2022 年夏の甲子園大会ではベスト 4 に輝く。2023 年 8 月・9 月に行われた「第 31 回 WBSC U-18 ベースボールワールドカップ」に出場し、日本チーム初の世界一に貢献した。